

イスラーム

という言葉を知ると、私たちはイラクやパレスチナから連日伝えられる悲惨な光景をすぐに思い出します。そして、イスラーム社会は何も中東にだけあるのではなく、世界中の都市を中心に多くのイスラーム教徒が存在していることを忘れがちです。イスラーム社会は戒律が厳しく、「豚肉を食べるのは禁止」「飲酒は禁止」「女性が外出する時には常にベール（目の部分だけをあけて頭からすっぽり全身をおおう外衣）をまとうねばならない」——私達が新聞やテレビの報道を通じて得た情報からは、イスラーム社会は不寛容で他宗教と相容れないといった先入観を持たれがちです。



「実際のイスラーム社会はもっと寛容度が高く、柔軟性に富み、他人にイスラーム教を強いることはない」——11月13日（土）、三鷹駅前コミュニティセンターでMISHOPフォーラム「イスラームの日常世界を訊く」が開催され、その中で、講師の片倉もとこさんはそう訴えました。片倉さんは現在中央大学教授で、カイロ大学留学を契機にイスラーム研究を始め、イスラーム世界を文化人類学的観点から分析された著作を多くお持ちです。

片倉さんは、非日常的なイスラーム情報が巷に氾濫している現状に対して、幾つかのキーワードをもとに、イスラーム社会の根幹を成す概念が何かについて、柔らかな口調で丁寧に説明されました。その幾つかをここで紹介します。

「イスラーム社会において、人生とは『イルム』を得ること」——「イルム」とは「知ること」という意味だそうです。ムスリムが最も重視するのは「ラーハ」を得ること、この「ラーハ」を、片倉さんは「ゆとり」と「くつろぎ」を一緒にした「ゆとろぎ」という言葉で表現します。ゆとろぎの時間をたくさん持つことが人間らしい、いい生き方だとイスラーム社会で言われます。そして、このラーハの1つが、学ぶこと、知識を得ること、人が偉いか偉くないかもこの「イルム」を持っているかどうかで判断されるのだそうです。「MISHOPフォーラムの参加者の皆さんは、楽しみながら勉強をしておられる。これも『ラーハ』の最たるものですね。」と片倉さんは言います。

また、イスラーム原理主義者の残虐な行為を耳にする機会の多い私たちはイスラームを宗教と結びつけて考えがちですが、むしろ生活様式、トータルシステムとしてとらえてみてほしいと片倉さんは提案します。そして、この生活様式と密接に結びついたイスラームは、中東から世界中に広がります。世界の主な国際空港には必ずといっていいほどイスラーム教徒の礼拝用のモスクが設置されています。イラクの民主化を旗印に攻撃を行なった米国の首都ワシントンへの玄関口であるダレス空港ですらモスクを整備しています。日常の生活習慣に強く根ざしながらも、土着の慣習に対しても柔軟にこれを取り込み、他人への宗教の強制も強くない寛容性が、世界中の都市において若年のインテリ層への伝播に繋がっていったのではないかと考えられます。

トータルシステムとしての考え方は、イスラームの根幹思想の一つである「タウヒード」という概念にも反映されています。これは、世界は人間の体のようなもので、多様な要素から構成されて一つの世界が形成されているものです。グローバリズムを是とする西洋思想は前進主義と呼ぶことができますが、イスラームでは進むよりも退くことで解決を指向するといわれます。これが、柔軟性や寛容性、多様化といったイスラーム社会の特徴に繋がっているようです。そして、多様な部分を取り込んでゆくことで、イスラームが社会として発展してゆくのだと片倉さんは言います。

また、イスラームでは、生産よりも配分、分かち合うことが重視されます。収穫があったら分配する、損失が出ても共有する、喜びも悲しみも皆と共有しようとする考え方です。高価なものを購入したら、近所に剰余金がお裾分けされるそうです。

お話が終わると、会場から沢山の質問が片倉さんに寄せられました。その多くは、今イラクで起きている出来事を引き合いに、イスラームの人々がそれをどのように受け止めているのか、片倉さんご自身がそれらをどう見ているのかという点に集中しました。「今、イラクで起きていることを見ると落ち込む。」と片倉さんは指摘します。自殺が禁止されているイスラームでなぜ自爆テロが起きるのか、自爆する若者の顔つきを見ていると、思い込みが激しすぎるのではないかと、理工系で複雑な思考をしない若者が自爆テロに走っているように思えてならないと言います。米軍のイラク空爆に関しても、元々イスラームの人々はプライドが高く、イスラーム文明の高さを空爆という形で無視されたことへの反発は大きいと言います。力だけで解決できるとは限らない。米国は、なぜイラクで自分たちの取った行動が思うように進んでいないのかをよく考えてみる必要があるのではないかと指摘されました。

最後に、対イラク政策で米国に追従した日本の対応について、これまでイスラームが日本に対して抱いていた親近感を完全にご破算してしまったと片倉さんはおっしゃいました。静かな口調でしたが、その中に無念さや寂しさを感じたのは私だけでしょうか。

国際理解委員 山田浩司 (MISHOP会員)